

氏 名：関 根 弘 子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

報 告 番 号：甲第105号

学 位 記 番 号：博第103号

学位授与年月日：令和4年3月17日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論 文 題 目：小児集中治療室における人工呼吸器離脱後の乳幼児への看護実践

Nursing Practice for Infants and Toddlers After Tracheal Extubation
in a Pediatric Intensive Care Unit

論 文 審 査 員：主査 井 村 真 澄

副査 江 本 リ ナ（正研究指導教員）

副査 三 浦 英 恵（副研究指導教員）

副査 川 原 由 佳 里

副査 岡 田 彩 子

論文審査の結果の要旨

日本において、集中治療を必要とする子どもが年間に推定2万人以上いる一方、重篤な小児患者を専門的に治療する小児集中治療室（PICU）は全国に42施設あるものの340病床に達しておらず、PICUの更なる拡充が求められている。欧米ではPICUが普及して60年が経ち、治療が確立しPICU退室後の子どもへの影響も明らかにされてきた。日本においてPICUは未だ発展途上にあり、PICU特有の看護も模索段階にある。特に、PICU入室率が高い乳幼児は、人工呼吸器による侵襲や薬剤の影響を強く受け、人工呼吸器離脱後であっても生理学的に容易に循環状態が破綻しやすい。また、乳幼児は自分の身に起きていることを言語で表現することが出来ない発達段階にあり、人工呼吸器離脱後の乳幼児がどのような状態にあるのか、どのようなことを表現しているのか、何をするとよいのかなどを読み取り、その子どもに適した看護を展開するには高度なスキルを要する。しかし、既存の研究では、実際に看護師がどのように看護しているのかその詳細は見出されていなかった。本研究はこれまで明らかにされてこなかったPICUにおける看護に着目しており、小児集中治療の臨床看護の質保証と向上にとって、今日的な意義ある研究と評価された。

本研究は看護師の実践を明らかにするためフィールドワークとインタビューを行い、言葉ではうまく説明できない看護師の行為の詳細を記述することに挑戦した。生命の危機に直面する環境にあるPICUに研究者が入り込み、研究者の一举手一投足さえも即時的に乳幼児のバイタルサインや病態に影響を与えかねない中、乳幼児・家族・医療スタッフに対して繊細に配慮し観察したことで得られた結果である点は、本研究の強みでもある。また、看護師が子どもの微細な様子を気にかけて、看護師が迷いながらも子どもの状態をアセスメントし、循環状態が破綻するリスクを見極めながら細やかにその子どものニーズに応える姿をありありと記述している点が高く評価された。

本研究によって、乳幼児の身に起きている現象を絶え間なく観察しその意味を追求し続けている姿と、薬のみに頼らない方法で子どもを落ち着かせる姿が明らかにされ、医学モデルと成長発達生活モデルとのぎりぎりの相補性を探りながら遂行される看護実践が示された。高度医療が急速に発展する昨今、看護師には高度なスキルが求められるが、看護師の五感を通じた観察力、乳幼児のニーズを追求する姿勢、非薬物的なケアといった看護の原点とも言えることが展開されている点は、集中治療室の新たな看護として示唆に富んだ研究である。

審査の結果、本論文は本学の審査基準を満たしていると判断し、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。